

## 発表要旨（発表順）：

### 小野山和代(繊維)

私は「布にひそむ表情をひきだす」という主題のもと制作を続けている。2000年頃までは、織布のたてとよこの繊維をひくという手法により現れた皺や襞を生かし、制作を続けた。

(マイナス思考のファイバーワーク)

この試みを10年ほど重ねるうちに、染・織の仕事にほとんど用いない「化学繊維を使用すればどのようになるのか?」と考えるようになった。

近年、われわれの住空間はあらゆる繊維により演出され、人と環境に配慮した化学繊維が開発されている。布の表現の可能性も広がり、ファッションにも多大な影響を与えている。

化学繊維の特質を活用することで、布の重なりや陰影、皺、襞が一面にあらわれ、作品にあらたな可能性が生まれたのではと思う。

### 友田多恵子(紙) <http://taaart.com>

紙をステージに触覚を顕在化してみました。ゴワゴワ、ザラザラ、フワフワ、ブツブツ、親密なかかわり、ことばを超えるリアルな感覚こそが生の証しといえるでしょう。

「楮(こうぞ)」を原料に、溜(た)め漉(す)きという技法で紙を漉いています。原料を溶かした段階で墨、柿渋などの着色剤を各々混入、何層も漉き重ねると、繊維の方向がランダムな、厚みを増した紙の完成です。

漉き上がって乾燥した紙に水分を与えると(霧を吹く)、吊るす、掛ける、置く、曲げる、折る、巻く、しわくちゃなど、自在な造形が可能です。見た目の重さと実物の軽さのギャップ、紙に見えない視覚の混乱に魅了され、制作を続けています。

### 片山みやび(ガラス)

京都芸大在学中から、リトグラフで作品制作を始めました。現在まで一貫して、自然を含む自身の身近にあるものをモチーフとして、人間にとってのそれらの存在の重要性をテーマに作品を制作続けています。約35年間制作続ける中で、2010年から1年間文化庁の海外派遣研修員としてのデンマーク滞在の時に出会ったガラスという素材に魅了され、フュージングガラスという技法で作品制作を行うようになります。そして、並行して制作してきた油彩やアクリルによるタブローに、フュージングで成形したガラスをコラーージュするという現在の方法に辿り着きました。結果的に色々な素材を使って表現することになりましたが、それぞれのたまかな技法の説明、また素材の特性の解説など、そして色々な素材を使用する際に作品として成り立たせる上で、私なりに重きを置いているところなどをお話しできればと考えています。

## 堤展子(陶)

陶芸といえば伝統工芸、食器などの器物が一般である。陶芸作品には機能性のないアート性の高い造形作品も多く見られる。

陶芸技法以外でも造形が可能ではないかとの指摘を受ける事が機能性の無い陶芸作品には多いと思う。

陶磁器によるアート性の高い造形作家、あるいは工芸作家が何故陶芸家と名乗るのか、他の素材では制作出来ないのかとの疑問は多いと考えられる。

陶芸家は芸術家であり、工芸家であり、クラフトデザイン作家であり、職人であり、「やきものや」である。

陶芸は科学変化で土も釉薬もいろいろな表情を持ち、技法によってもいろいろな表現が可能になる。それら全てにより「カタチ」となり「想い」を発信することが出来る。

私は陶芸の素材や技法、文化が面白くて常に新しい発見でドキドキしたり、凹んだりして、職業を問われたら「陶芸家」と答えるのである。